

## 第2章 吉田遺跡第I地区B区の調査

### 1 調査の概要

「B区は、A区の北東側に側溝が設けられるため、工事で削り取られる幅2m、長さ10mの範囲を調査して、多くの弥生中期の土器類と柱穴群を検出し、台地の南斜面に弥生村落が埋存していることを知る事ができた。また、土師器や須恵器を含む包含層を検出したが、これは二次的な堆積物で、その供給源の段丘上に当時の村落跡が存在することを察知した。」と、吉田遺跡調査団の『吉田遺跡発掘調査概報』には報告される。A区と同様に、調査区の位置図及び、遺構平面図は散逸している。わずかに残された写真(PL-41)が、当時の調査状況を断片的に伝えるのみである。

調査期間は、昭和41年10月15日から同月30日までである。

### 2 層位

A区と同様に基本層序(Fig.73)を示すのみにとどめたい。なお、表土層(耕土)は構内造成によって削平され、調査時には包含層が露出する状態であつたらしい。

第I層：茶褐色土、厚さ30~40cm、土師器が多く、弥生土器をわずかに包含する(包含層I)  
第II層：黒色土、厚さ10~20cm、弥生土器のみ包含する(包含層II)  
第III層：色調不明、この面で柱穴を検出する(地山)

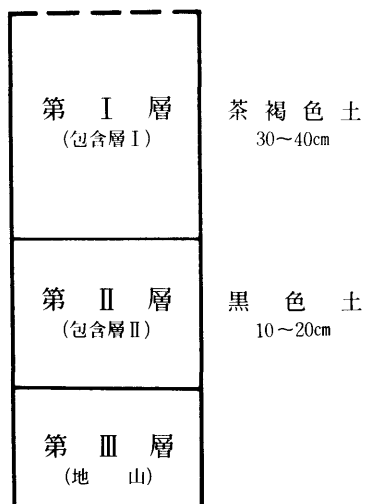


Fig. 73 B区基本層序模式図

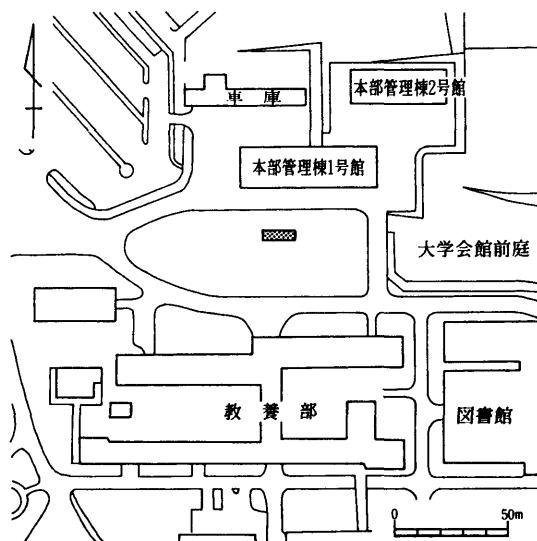


Fig. 72 B区調査区位置図

### 3 出土遺物

吉田遺跡第 I 地区 B 区からは、縄文時代晩期後半から中世までの土器が出土している。人工的な加工を施した石器・剥片は整理時には確認できなかった。

#### 縄文時代晩期後半 (Fig.74-1~3, PL.42)

わずか 3 片ではあるが、縄文時代晩期後半の特徴を示す土器片が出土している。

##### 深鉢 (Fig.74-1, PL.42)

口縁部片である。口縁端部を欠く。口縁端部よりわずかに下がった位置に、低い断面カマボコ状の突帯を貼り付ける。突帯上は左から右へ O 字状に、キザミが施される。

##### 浅鉢 (Fig.74-2・3, PL.42)

2 は直口の浅鉢である。口縁端部内面は丸く肥厚させる。内外面風化著しい。3 は内面にミガキが施され、屈曲部をもつ破片であることから、「く」字状口頸部浅鉢の胴部片と判断した。胴部外面には条痕を施す。内面は口縁接合部分のところがくぼむ。

#### 弥生時代初期 (Fig.74-4・5, PL.42)

4 は壺形土器の口縁部片である。口頸間に段を有する。内外面にはミガキ調整が施される。外面には丹状の付着物が認められる。5 は胴部に段を有する甕の胴部片である。段には、右から左へのキザミが施される。

5 の特徴を有する甕は、山口県下では下関市延行条里遺跡<sup>2)</sup>、山口市小路遺跡<sup>3)</sup>から出土している。山口県弥生時代初期に位置づけられるものである。4 は胎土・丹状の付着物など小路遺跡の壺に似ており、5 の甕と共に弥生時代初期に位置づけられると思われる。

#### 弥生時代前期 (Fig.74-6~32, PL.42・43)

##### 壺 (Fig.74-6~23, PL.42・43)

6 は口縁部に段を有するもの。口縁端部に面をもち、下端にキザミを施す。7~10 は装飾が沈線のみのものである。いずれも文様帯の下端と上端が低められ、削り出し突帯となる。7~9 はヘラによる沈線。10 は鋸歯状圧痕のつかない貝殻による施文である。11~15 は鋸歯状圧痕のつかない貝殻による羽状文である。11・12 は頸胴間に段を有する。16~20 は鋸歯状圧痕のつく貝殻による羽状文である。21・22 は綾杉文である。21 は鋸歯状圧痕のつかない、22 は鋸歯状圧痕のつく貝殻による施文である。23 は鋸歯状圧痕のつく貝殻による木葉文である。

##### 甕 (Fig.74-24~32, PL.43)

24 は突帯を有する甕である。27・30 はヘラによる沈線である。25・26・28・32 は板状工具の押圧による沈線である。31 は沈線間に列点文を配する。

出土遺物

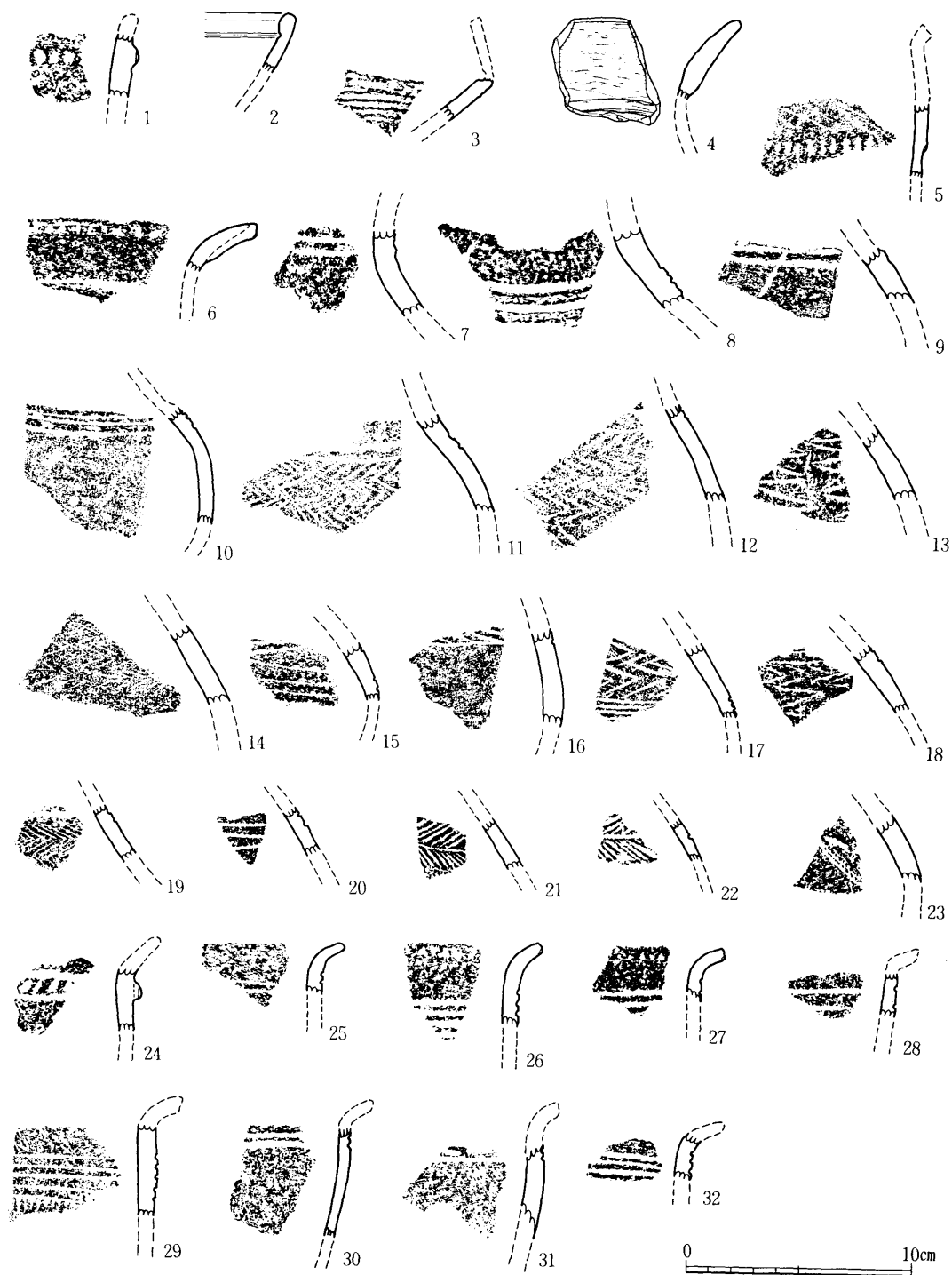


Fig. 74 B区縄文時代晩期後半~弥生時代前期土器実測図

弥生時代中期 (Fig.75, PL.44)

第 I 地区 B 区は、「多くの弥生時代中期の土器類と柱穴群を検出し台地の南斜面に弥生村落が埋存していることをしることができた」と概報に記述される。

垂下口縁壺 (Fig.75-33~36, PL.44)

33・34は同一個体の口縁部と胴部であると考えられる。垂下する口縁外面には、先端の鋭い板状工具の押圧による山形文が施される。口縁部内面には 2 条 1 組の突帯が貼り付けられる。胴部の最も張った部位よりもやや上部に、2 条 1 組の断面三角形突帯を貼り付ける。外面調整にはタテハケ後ヨコミガキが施される。内面には左上がりのハケ調整が施される。

35は口縁が垂下する屈曲部の上面が、ヨコナデによってつまみ上げられ突出する。垂下する口縁外面には山形文が施される。器面の風化が著しい。36は頸部の破片である。頸部に 2 条 1 組の断面三角形突帯が貼り付けられる。口縁内面に断面三角形突帯を貼り付ける。

北部九州系長頸壺 (Fig.75-37, PL.44)

37は口頸部の破片である。頸部はやや外反気味に直立する。口縁端部はヨコナデによって面をもち、内側に肥厚する。口縁端部より下がった位置に断面三角形の突帯を貼り付ける。外面はミガキ調整、内面にはシボリ痕を残す。

北部九州系壺胴部 (Fig.75-41~43, PL.44)

41・42は断面M字状の突帯をもつ。41は最も張った位置に、突帯を 1 条貼り付ける。42は突帯を、2 条以上貼り付けている。43は断面カマボコ状の突帯を、2 条以上貼り付ける。

壺蓋 (Fig.75-38, PL.44)

ボタン状のつまみをもつ。破片のため全形はわからない。外面には、ハケ調整を残す。

突帯甕 (Fig.75-44・45, PL.44)

44は口縁端部を欠く。如意状の口縁よりやや下がった位置に、断面三角の鋭い突帯が貼り付けられる。風化が著しいが、突帯上にかすかにキザミが残る。45は口縁部を欠く。屈曲部よりやや下がった位置に、断面三角の突帯が貼り付けられる。突帯上にはキザミが施される。

高坏 (Fig.75-39, PL.44)

39は高坏脚部の基部である。外面には丹が塗られる。

異形土器底部 (Fig.75-40, PL.44)

40は底面に高台状の低い脚を貼り付ける。外面はミガキ調整。内面はナデ調整。一部にツメ跡を残す。

出土遺物

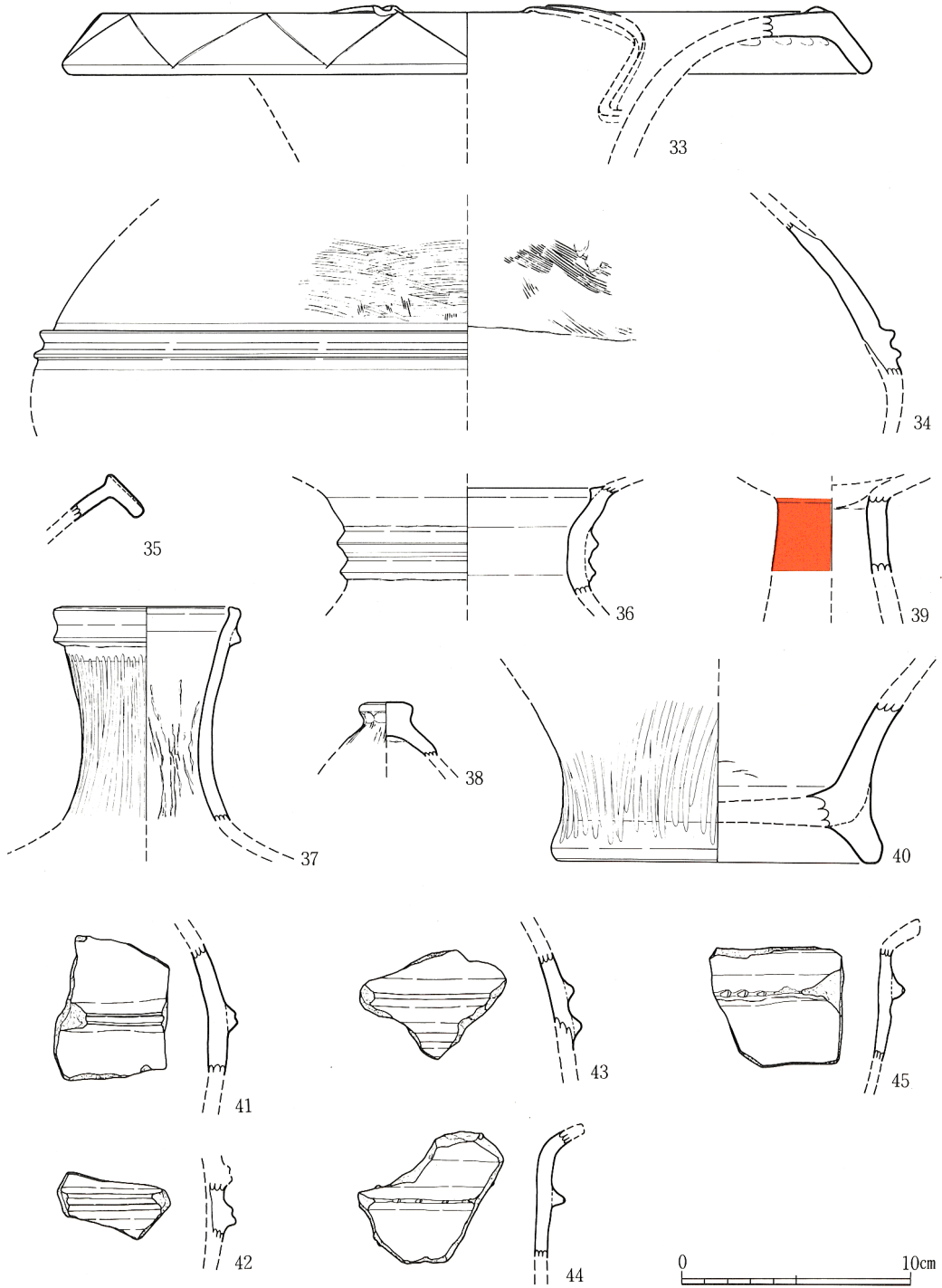


Fig. 75 B区弥生時代中期土器実測図

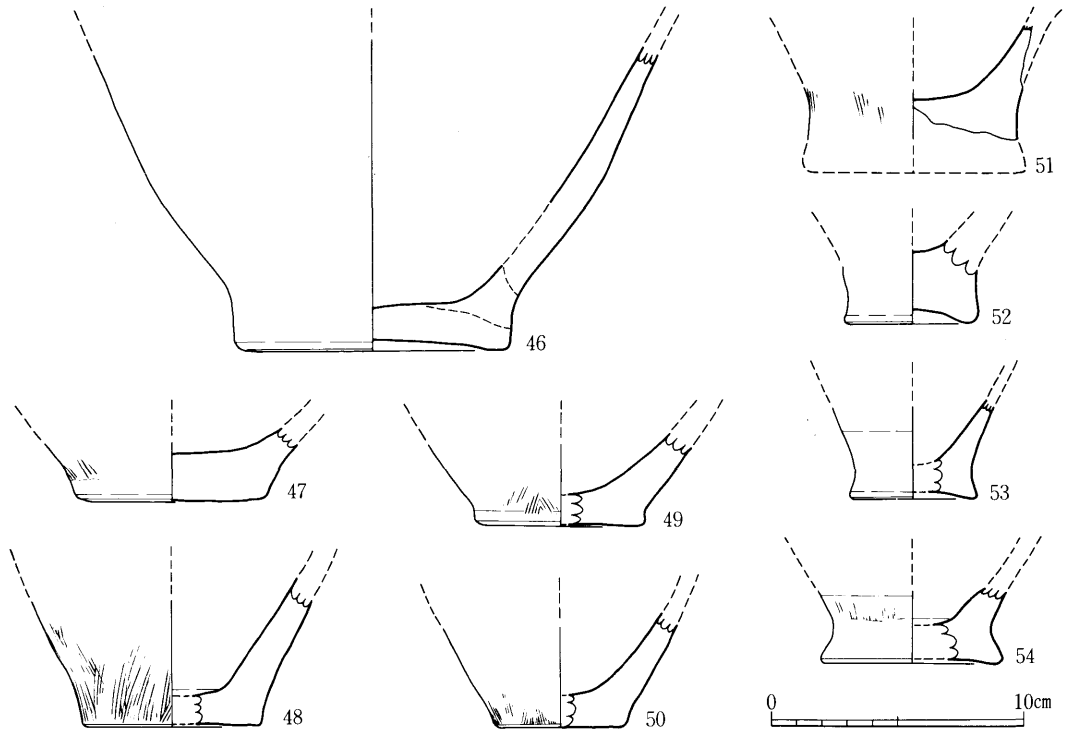


Fig. 76 B区弥生時代土器底部実測図

**弥生時代前期土器底部** (Fig.76-46~50, PL.43・44)

46・47は壺の底部である。46は底面端部が高台状に盛り上がる。胴部はかなり立ち上がる。内外面の風化が著しく、調整は見えない。接合痕にそって剥離する。外面には、植物種子の圧痕がある。47は底面を削る。内外面の風化は著しいが、外面に一部ハケ痕を残す。

48~50は甕の底部である。48は外面調整にタテハケを施す。内面はナデ調整である。49は内外面の風化が著しい。外面に一部タテハケ調整が残る。50は内外面が風化する。外面には一部タテハケ調整が残る。やや小形で、胎土・ハケ調整が48・49とは若干異なる。鉢底部の可能性もある。

**弥生時代中期土器底部** (Fig.76-51~54, PL.44)

51は底面が残っていない。内外面の風化が著しい。外面には一部ハケが残る。52は底部が円筒状に突出するもの。底面はくぼむ。強い二次焼成をうけ、器面に調整は残らない。53は底部端が外方に突出する。外面底部側面にはヨコナデが施される。内面はナデ調整である。54は底部端が外方に突出する。外面底部側面にはヨコナデが施される。胴部外面には一部ハケが残る。内面は風化のため調整が残らない。

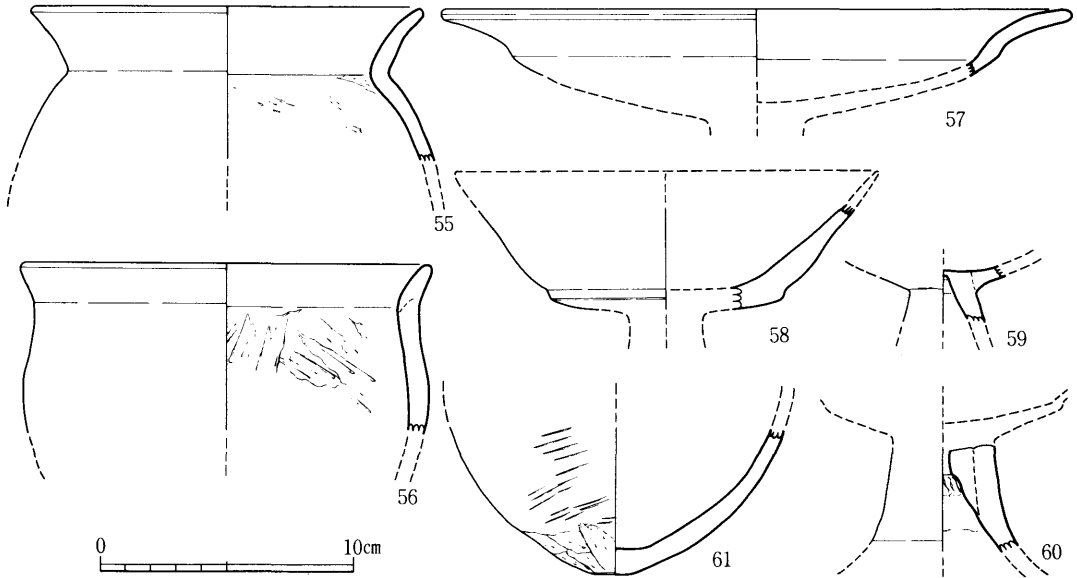


Fig. 77 B区弥生時代後期～古墳時代中期土器実測図

弥生時代後期～古墳時代中期 (Fig.77, PL.45)

弥生時代後期～古墳時代中期の特徴をもつ土器をまとめた。

甕 (Fig.77-55・56, PL.45)

55は張った胴部に、外反した口縁部をもつ。内外面の風化が著しく、外面の調整は判読できない。内面は右から左方向へのケズリ調整である。所属時期は古墳時代前期と考えられる。56は張りのない胴部に、やや外反した短い口縁部をもつ。内外面の風化は著しい。内面にはケズリ調整が施される。所属時期は古墳時代中期と考えられる。

甕底部 (Fig.77-61, PL.45)

61は丸底化した甕底部である。胴部にはタタキ痕が残る。底部側面は、底面から胴部側に向かってケズリが施される。内面はナデ調整である。底面は二次焼成により、赤褐色を呈する。所属時期は、古墳時代前期と考えられる。

高坏 (Fig.77-57～60, PL.45)

57は坏部片である。胴部は浅く、口縁部は大きく外反する。内外面の風化は著しい。所属時期は弥生時代後期と考えられる。58は口縁端部を欠く。胴部と口縁部の境は、明瞭な段をなす。内外面が風化する。所属時期は古墳時代前期と考えられる。59・60は脚部片である。ともに裾部を欠く。59は小形器台の可能性もある。60は脚中心部に、棒状工具の抜きとり痕がある。59・60の所属時期は、古墳時代前期と考えられる。

### 古墳時代後期～中世 (Fig.78, PL.45)

古墳時代後期から中世の特徴をもつ、土器・石鍋をまとめた。

#### 須恵器蓋 (Fig.78-62~64, PL.45)

62は壺蓋である。破片のため、つまみの有無は不明である。天井部は扁平である。端部を離れ、中心によった部分に直立した立ち上がりをもつ。立ち上がり端部は丸い。所属時期は古墳時代後期と思われる。63は坏蓋とするには径が小さく、短頸壺の蓋と考えられる。天井部と口縁部の境には稜をもつ。口縁端部は丸い。所属時期は古墳時代後期と思われる。64は坏蓋つまみの破片である。つまみは扁平で中央が凸形をなすものである。所属時期は奈良時代と思われる。

#### 須恵器壺 (Fig.78-65, PL.45)

65は壺口縁部片である。口縁端部がすぼまり、端部よりやや下がった位置が膨らみをもつ。内面には自然釉が付着する。所属時期は不明である。

#### 須恵器高坏 (Fig.78-66, PL.45)

66は高坏脚部の基部破片である。脚裾部は大きく開く。所属時期は不明である。

#### 土師器甕 (Fig.78-67・68, PL.45)

67は肩の張った長胴の体部に、わずかに外反する口縁部がつく。口縁部は短く肉厚である。口縁部端部は丸くおさめる。外面の最終調整はナデであるが、やや左に傾いたタテハケが残る。内面はナデ調整である。内面底部近くに指頭痕が残る。所属時期は古墳時代後期から奈良時代と思われる。68は張らない胴部に、短いやや外反した口縁部がつく。口縁端面は丸い。風化が著しいが、外面調整はタテハケ、内面調整は右から左方向のヨコハケが残る。所属時期は、古墳時代後期と考えられる。

#### 土師器甕把手 (Fig.78-73, PL.45)

73は把手のみの破片である。わずかに残った胴部に、ハケ痕が残る。把手だけのため、所属時期は不明である。

#### 須恵器坏 (Fig.78-69, PL.45)

69は底面と体部の屈曲部に接して高台がつく。高台は内端・外端とも接地するものである。外面には高台接合痕が明瞭に残る。

#### 土師器碗 (Fig.78-70・71, PL.45)

70は高台を底部側面に貼り付けるもの。内外面の風化が著しい。71は胴部より突出した底部をもつもの。風化が著しいが、底面には糸切りの痕跡が残る。



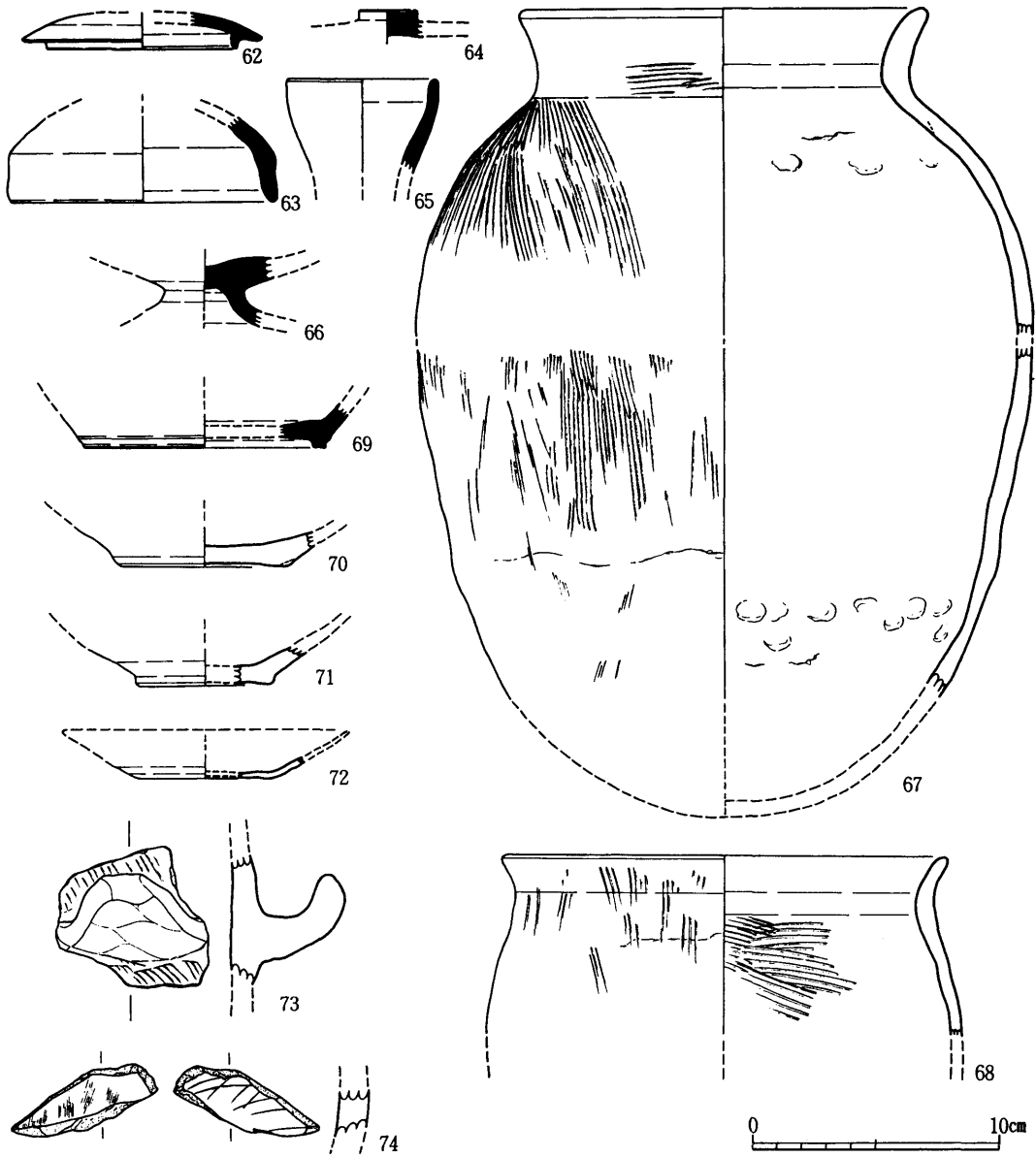


Fig. 78 B区古墳時代後期～中世土器実測図

土師器皿 (Fig.78-72, PL.45)

器壁の薄い土師器小皿の底部である。体部が直線的に開きながら立ち上がる。底面には敷物の圧痕をもつ。

石鍋 (Fig.78-74, PL.45)

滑石製の石鍋である。内面にノミ跡が残る。外面には煤が付着する。

#### 4 小結

B区はA区と同様に遺構平面図は散逸し、土層断面図が残るのみであった。他の当時の記録としては、写真が埋蔵文化財資料館に収蔵されている。その写真（PL-41）によれば幅2m、長さ10mの細長いトレンチにアゼを3本残し、発掘を行っている。土器には1～4区までの註記があり、この発掘方法を示すのであろう。

また、昭和41年当時、第Ⅰ地区内は区分けされておらず、本調査区の出土土器の註記は第Ⅰ遺跡のみである。第Ⅰ地区内が区分けされたのは、昭和42年大学本部建設予定地（現C区）の調査かららしく、大学本部建設予定地（現C区）出土土器には、B区の註記がなされている。このB区の註記は、昭和41年の第Ⅰ地区の調査（現A・B区）に対してのものと思われる。本章のB区と、土器註記のB区（現C区）は異なるものである。吉田調査団発行の概報は現在の地区名通りになっており、概報刊行以前に地区の改定が行われたと推察される。本章では概報以降の地区名通りに、第Ⅰ地区B区として報告した。

#### 遺構

概報に「多くの弥生中期の土器類と柱穴群を検出し、台地の南斜面に弥生村落が埋存していることを知ることができた。」とあるように、当時の写真には多数の柱穴が写っている。ただし、今回の遺物整理では、柱穴出土の註記をもつ弥生時代中期の土器はなく、柱穴群が弥生時代中期のものであると確認はできなかった。

#### 出土遺物

##### 縄文時代晩期後半

吉田遺跡からは、<sup>4)</sup> 大学会館敷地、<sup>5)</sup> 同前庭部、<sup>6)</sup> 本部2号館、<sup>7)</sup> 教育学部実習棟、<sup>8)</sup> 遺跡保存地区、<sup>9)</sup> 教養部複合棟、<sup>10)</sup> 農学部連合大学院校舎敷地、の7地点から縄文土器が出土している。第Ⅰ地区B区出土縄文土器は、それに加えるべき新資料である。2は所属時期が不明であるが、1・3は縄文晩期後半、刻み目凸帯文土器段階の土器である。吉田遺跡における刻み目凸帯文深鉢の出土地は、教育学部構内J-19・20区、本部2号館、教養部複合棟である。河村吉行氏が推定する<sup>11)</sup>ように、第Ⅰ地区B区の背後に広がる大学会館前庭部から第二学生食堂付近の洪積段丘上に、縄文時代晩期中頃以降の集落が展開する公算は高い。

##### 弥生時代初期

B区からは、特筆すべき弥生時代初期の土器が出土している。5は甕胴部片であるが、その特徴は胴段端部に施された刻み目である。胴段端部への刻み目といった特徴は、全段階である縄文時代晩期後半の二条突帯深鉢をほうふつさせる。二条突帯深鉢が弥生化して、如意状口縁甕へと変化していく過渡的な形態と言えよう。

## 小 結

この特徴をもった甕は、前述したように山口県下では小路遺跡と延行条里遺跡から出土している。近年、北九州市でも、畠山遺跡<sup>12)</sup>C地点、石田遺跡<sup>13)</sup>、寺内遺跡<sup>14)</sup>、南方・上ヶ田遺跡<sup>15)</sup>第9地点から類似した甕が出土している。遠賀川以東に分布する初期弥生甕である。

4の壺形土器は、段の境が不明瞭で、胎土に多量の微砂粒を混ぜている。これは、貝殻による施文が発達した弥生時代前期中葉の壺がもつ、整形された明瞭な段、精製粘土に1～2mmの粒が揃った砂粒を混ぜる特徴とは明らかに異なっている。この特徴をもつ壺は小路遺跡で、5の特徴をもつ甕と共に出土している。よって、4の壺形土器も弥生時代初期に位置づけられるものであろう。

吉田遺跡より南西約1.5kmには小路遺跡があり、山口盆地の南西部山麓に弥生時代初期の生活圏が展開していたものと思われる。また、B区で二次堆積とはいえ、弥生時代初期の土器と縄文晩期突帯文土器が出土していることは単なる偶然とは考えられない。今後の調査によって、縄文時代から弥生時代への変遷を示す資料が出土する可能性がある。

### 弥生時代前期

B区からは比較的保存状況の良い、前期中葉の土器が出土している。A区の前期中葉の土器も併せて考えるならば、付近（背後の洪積段丘上か）に吉田遺跡では未だ検出されない前期中葉の遺構が存在する可能性は高い。

### 弥生時代中期

B区出土の中期弥生土器もその大半が、A区と同じく後半に属する。37の北部九州系長頸壺は、類例が宇部市北迫貝塚<sup>16)</sup>で多く出土している。この長頸壺もA区無頸壺（Fig.43-136）と同様に遠賀川以東で盛行する。この他、39の丹を塗った高坏も北部九州系であろう。

概報には、多くの中期弥生土器が出土したとされるが、さほど際だった量ではない。また、柱穴群が弥生中期のものか明らかにできる資料はなく、「台地の南斜面に弥生村落」の一文は注意が必要である。

### 弥生時代後期～古墳時代中期

B区出土土器中、唯一柱穴からの出土を示す註記がなされるのが61である。61は古墳時代前期前半の甕底部であるが、これによって柱穴群の一部が古墳時代前期のものを含んでいることが推察される。

### 古墳時代後期～中世

A区に比べて、古代～中世の土器が極めて少ない。中世の遺物として、滑石製石鍋片が出土している。

吉田遺跡第Ⅰ地区B区の調査

[注]

- 1) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)
- 2) 下関市教育委員会『綾羅木川下流域の地域開発史 山口県下関市大字綾羅木・延行有富地内延行条里遺跡ほか発掘調査報告書』(1990年)
- 3) 山口市教育委員会『小路遺跡』(1988年)
- 4) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内学生会館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅲ、1985年)
- 5) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内学生会館環境整備に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅴ、1986年)
- 6) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅷ、1990年)
- 7) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内教育学部附属教育実践研究指導センター新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅶ、1988年)
- 8) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内遺跡保存地区の発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅷ、1990年)
- 9) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内教養学部複合棟新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅶ、1988年)
- 10) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅺ、)
- 11) 河村吉行「山口大学構内の埋蔵文化財の分布」(『山口大学埋蔵文化財資料館』Ⅹ、1992年)
- 12) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室『畠山遺跡C地点』(1990年)
- 13) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室『石田遺跡』(1990年)
- 14) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室『寺内遺跡第3・4・5・6・7地点』(1991年)
- 15) 梅崎恵司「7.徳力土地区画整理事業用地内の遺跡」(北九州教育文化事業団埋蔵文化財調査室『埋蔵文化財調査室年報』7、1991年)
- 16) 宇部市教育委員会「北迫遺跡」(『宇部の遺跡』、1968年)

Tab. 4 出土遺物観察表

法量( )は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	註記	備考
縄文時代晩期後半						
1	深鉢		暗褐色	2~3mmの砂粒を含む		外面に煤付着
2	浅鉢		黒色	1mmの砂粒を含む		風化著しい
3	浅鉢		黒色	1~2mmの砂粒を含む		外面糸痕調整
弥生時代前期						
4	壺		淡褐色	微砂粒を多量に含む	S41.11.16 吉田 第I・第I区	外面赤色顔料塗布か?
5	甕		淡褐灰色	1~2mmの砂粒を含む		
6	壺		黄灰色	1~2mmの砂粒を含む		口唇下端にキザミ
7	壺		淡黄灰色	2~3mmの砂粒を含む	S41.11.24 吉田 第IAノ2	ヘラ描き沈線
8	壺		暗褐色	2~3mmの砂粒を含む		ヘラ描き沈線
9	壺		淡褐色	2~3mmの砂粒を含む		ケズリ出し突帯
10	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む		鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧羽状文
11	壺		①淡褐色 ②赤褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.11.17 吉田 第I・2区	鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧羽状文
12	壺		①淡赤褐色 ②淡灰褐色	2~3mmの砂粒を含む	S41.11.17 吉田 第I・2区	鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧羽状文
13	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧羽状文
14	壺		①褐灰色 ②淡黒灰色	1~2mmの砂粒を含む	S41.11.17 吉田 第I	鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧羽状文
15	壺		①淡赤褐色 ②淡黒灰色	赤色斑粒を含む		鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧羽状文
16	壺		①淡褐色 ②淡褐灰色	1~2mmの砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
17	壺		淡褐色	2~3mmの砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
18	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	判読不可能	鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
19	壺		①淡黄色 ②黒色	1~2mmの砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
20	壺		淡黄灰色	1~2mmの砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
21	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつかない貝殻による縞彩文
22	壺		赤褐色	2~3mmの砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつかない貝殻による縞彩文
23	壺		褐灰色	1~2mmの砂粒を含む	S41.11.17 吉田 第I・3区	鋸歯状圧痕のつく貝殻による木葉文
24	甕		淡黄灰色	1~2mmの砂粒と赤色斑粒を含む	S41.11.17 吉田 第I・3区	風化著しい
25	甕		褐灰色	1~2mmの砂粒を含む		板状工具による2条の押圧沈線
26	甕		黄灰色	1~3mmの砂粒を含む		板状工具による4条以上の押圧沈線
27	甕		赤褐色	2~3mmの砂粒を含む	S41.11.14 吉田 第I	2条以上のヘラ描き沈線
28	甕		①明褐色 ②淡褐色	2~3mmの砂粒を含む		板状工具による2条の押圧沈線
29	甕		淡赤褐色	3mmの砂粒を含む		板状工具による5条の押圧沈線
30	甕		赤褐色	1~3mmの砂粒を含む		2条のヘラ描き沈線
31	甕		淡灰褐色	2~3mmの砂粒を含む		ヘラ描き沈線間に列点文
32	甕		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		板状工具による3条以上の押圧沈線
弥生時代中期						
33	垂下口縁壺	①(32.0)	暗灰色	1~2mmの砂粒を含む		口縁部の内面に2条1組の突帯を貼り付ける
34	垂下口縁壺		①暗灰色 ②黒色	1~2mmの砂粒を含む		33と同一個体か
35	垂下口縁壺		明褐灰色	1~2mmの砂粒を多量に含む		風化著しい
36	垂下口縁壺		黄灰色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.11.17 吉田 第I・3区	風化著しい
37	細頸壺	①(7.2)	淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む		

吉田遺跡第Ⅰ地区B区の調査

法量( )は復原値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	註記	備考
38	壺蓋		淡赤褐色	1~2mmの砂粒を含む		
39	高坏		①赤色顔料塗布 ②黒灰色	1mm弱の砂粒をわずかに含む		
40	異形土器 底部	②(14.2)	①黒色 ②淡黄灰色	1~2mmの砂粒を多量に含む		
41	壺		①赤褐色 ②灰青色	1~2mmの砂粒を多量に含む		風化著しい
42	壺		①淡褐色 ②灰白色	1~2mmの砂粒を含む	S41.11.24 吉田第Ⅰ・2区	
43	壺		淡黄灰色	1~2mmの砂粒を含む		
44	甕		淡褐色	2~3mmの砂粒を含む		風化著しい
45	甕		淡赤褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.11.17 吉田第Ⅰ・3区	風化著しい
弥生時代土器底部						
46	壺 底部	②10.6	赤褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	S41.11.18 吉田第Ⅰ2区	種子の圧痕あり
47	壺 底部	②(7.4)	灰白色	2~3mmの砂粒を多量に含む		
48	甕 底部	②(6.6)	淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		
49	甕 底部	②(6.4)	淡褐色	2mm前後の砂粒を含む	S41.11.16 吉田第Ⅰ地区	
50	甕 底部	②(4.6)	淡灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.11.16 吉田第Ⅰ・1区	
51	甕 底部		淡黄灰色	2~3mmの砂粒を含む		
52	甕 底部	②4.6	①赤褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む		2次焼成による変色
53	甕 底部	②(4.8)	①赤褐色 ②褐色	1~2mmの砂粒を含む		
54	甕 底部	②(6.8)	①赤褐色 ②灰黒色	1~2mmの砂粒を多量に含む		
弥生時代後期~古墳時代中期						
55	甕	①(15.2)	①淡赤褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.11.17 吉田第Ⅰ・2区	風化著しい
56	甕	①(16.0)	①淡褐色 ②暗褐色	1~2mmの砂粒を含む		
57	高坏	①(24.6)	淡黄灰色	2~3mmの砂粒をわずかに含む	S41.11.15 吉田第Ⅰ	風化著しい
58	高坏		淡赤褐色	精製粘土	S41.11.16 吉田第Ⅰ・第1区	風化著しい
59	高坏		淡赤褐色	精製粘土		風化著しい
60	高坏		淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む		
61	甕 底部	②1.6	①赤褐色 ②褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.11.24 吉田第ⅠB・2区№18の中	
古墳時代後期~中世						
62	壺蓋	①(7.6)	灰青色	1mm前後の砂粒を含む		
63	壺蓋	①(10.6)	暗青灰色	1mm前後の砂粒を含む		
64	坏蓋		青灰色	微砂粒を含む		
65	壺	①(6.0)	灰青色	微砂粒を含む		内面に自然釉付着
66	高坏		灰青色	精製粘土		
67	甕		明褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.11.24	外面ハケ
68	甕	①(17.8)	赤褐色	微砂粒を多量に含む 黒炭母		風化著しい
69	坏	①(9.8)	青灰色	精製粘土		
70	埴	①6.8	淡赤褐色	精製粘土	S41.11.17 吉田第Ⅰ・2区	
71	皿	①(5.2)	灰白色	精製粘土にわずかに砂粒を含む		糸切り底
72	皿	①(5.4)	淡灰褐色	精製粘土		底面に板状圧痕
73	把手		淡褐色	微砂粒と赤色斑粒を多量に含む		瓶か?
74	石鍋					滑石製



(1) 吉田遺跡第I地区B区の全景



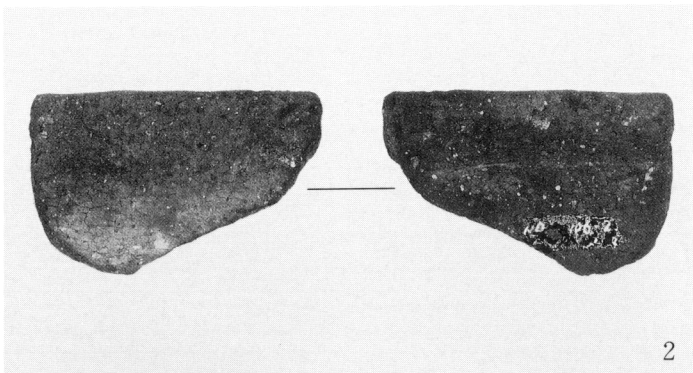
(2) 柱穴検出状況

吉田遺跡第I地区B区の調査

(2)



1



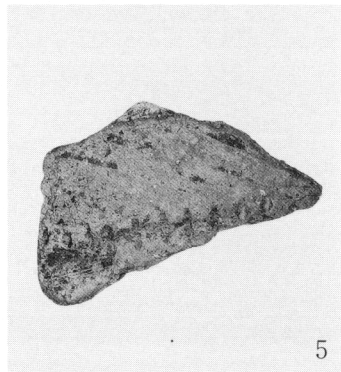
2



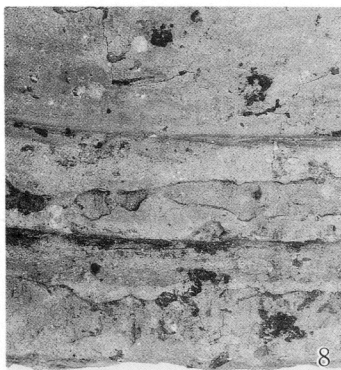
3



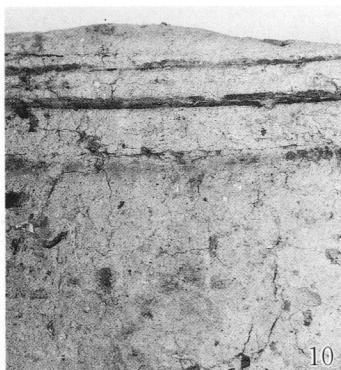
4



5



8



10



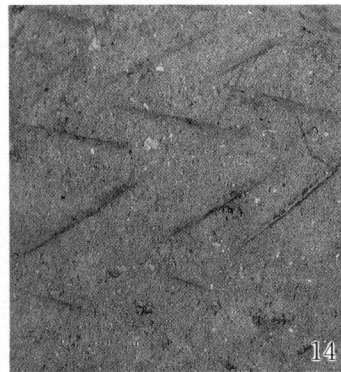
11



12



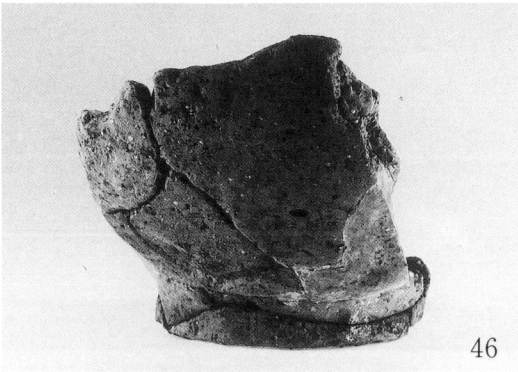
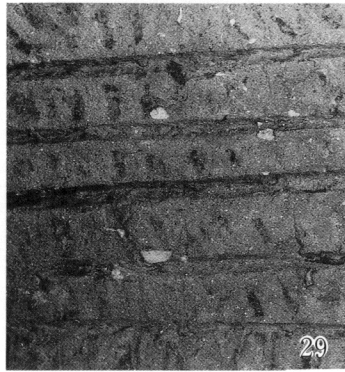
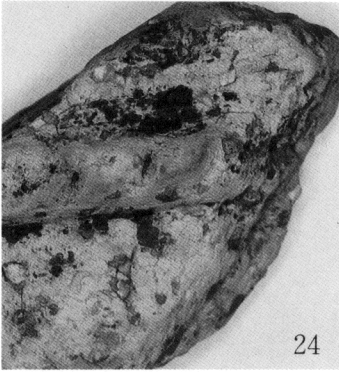
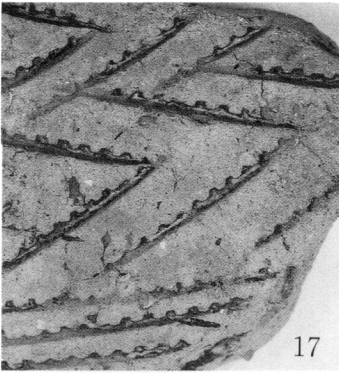
13



14

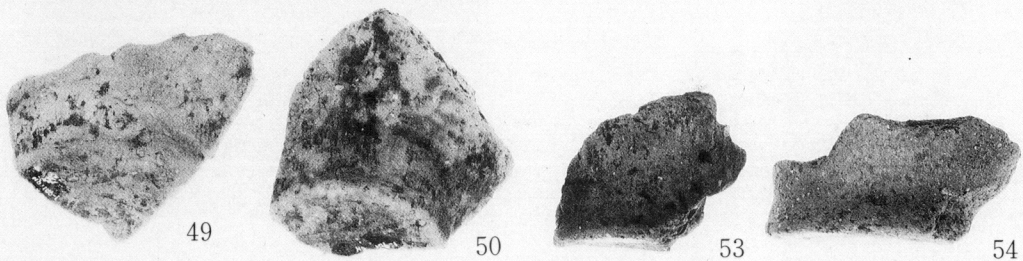
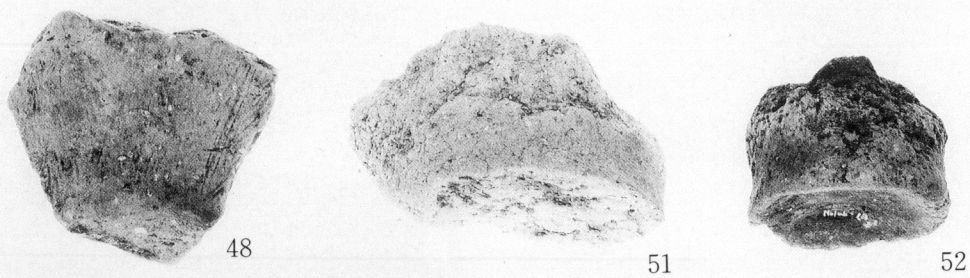
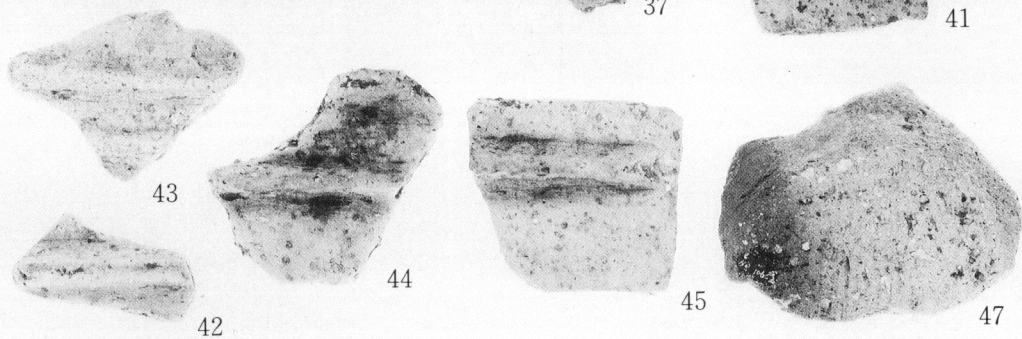
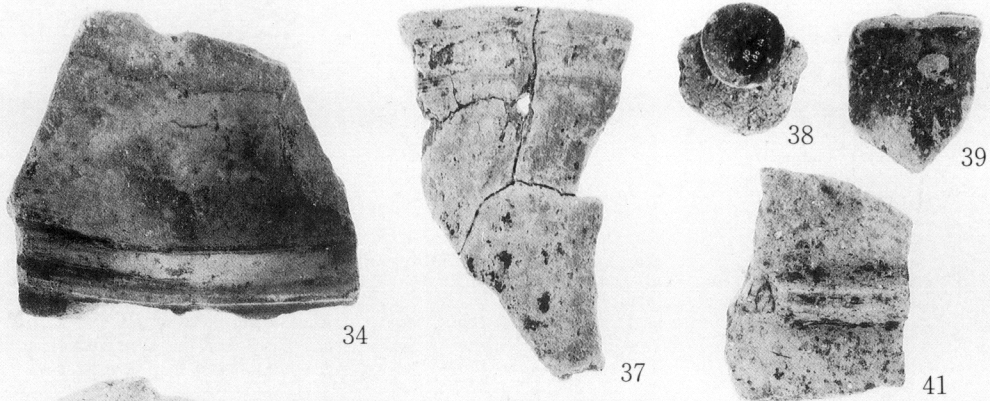
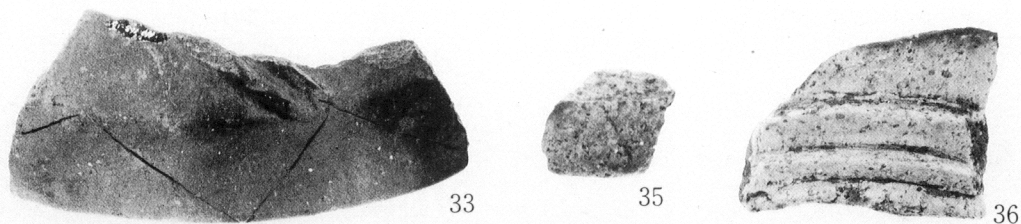
出土遺物 (1)



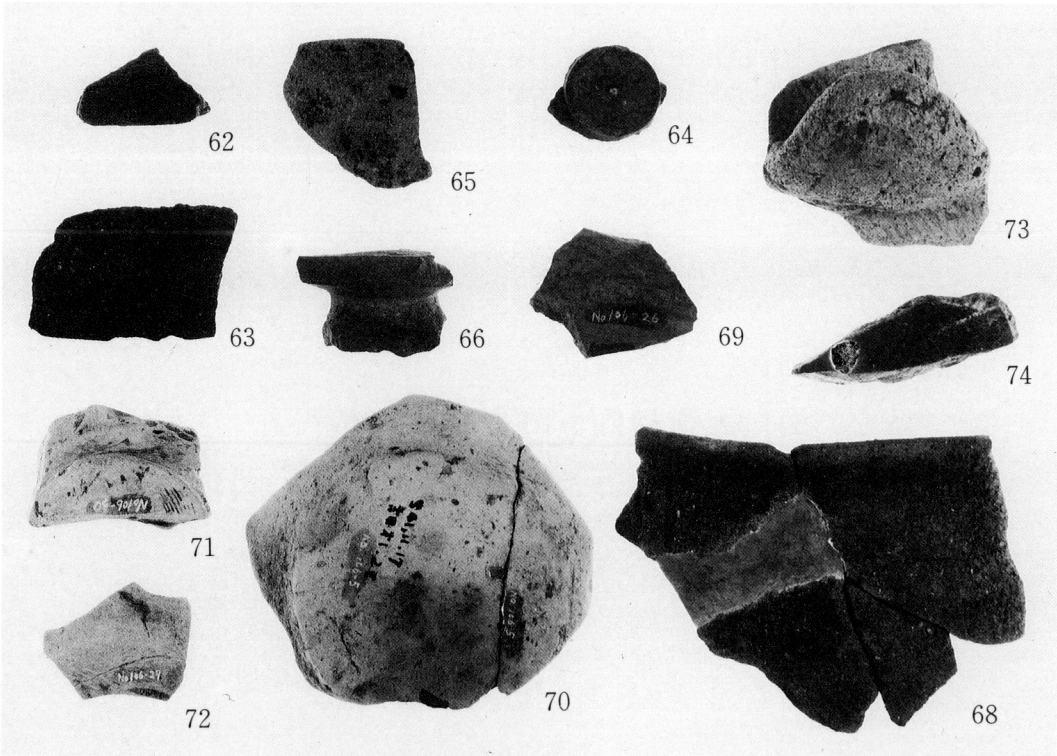
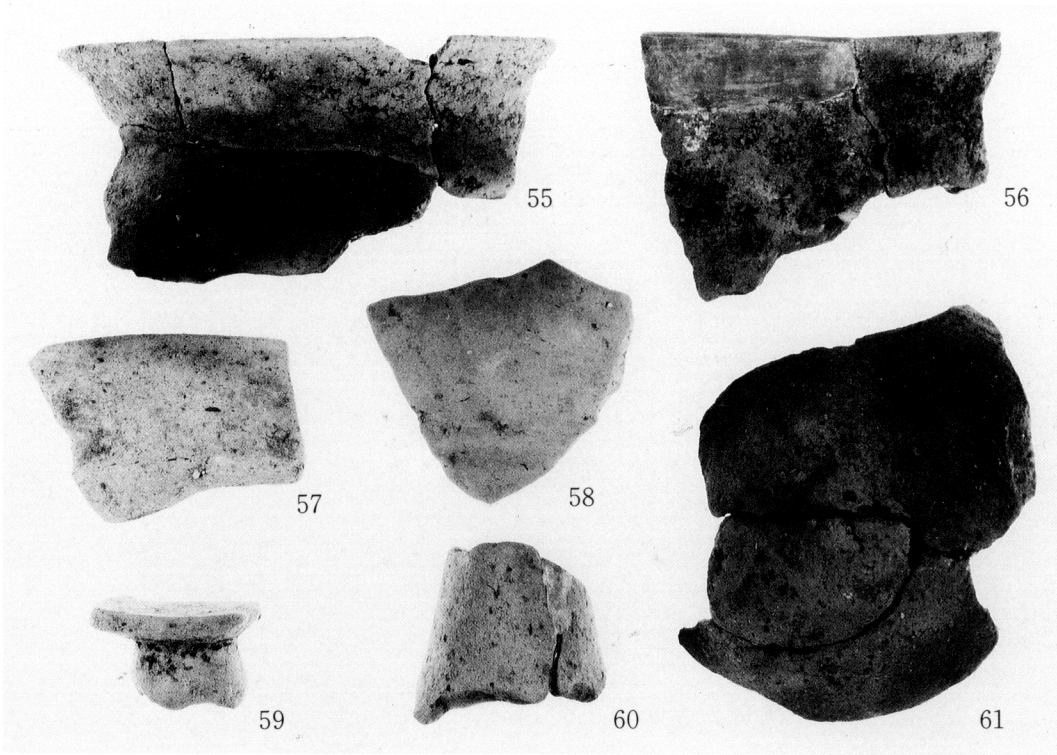


PL. 44

吉田遺跡第I地区B区の調査  
(4)



出土遺物 (3)



出土遺物 (4)